九、文王の芝居

昔といっても約二百年位前の話か、六郷に文王（ぶんのう）という男がいた。横手の蛇の崎橋を一と飲みにして有名になった手品使（てづま）[註9]である。盆の十六日の晩湯沢で芝居をやるという触れ込みだから、大評判で朝から芝居小屋に詰めかけ木戸が破れんばかりの盛況であった。二幕三幕面白くもおかしくもない芝居を見せられ、ウンザリした頃、笛、太鼓も賑やかに拍子木がチョンチョン鳴り、幕があき、魔法使の文王が現われた。それっとばかりに観衆がどよめきたった時、東西、東西、只今ここに現われましたる文王が、皆さんの御注文に応じ、なんでも持ってきて御覧に進ぜます。と声高らかに叫べば、四つ角の地蔵様を持ってこい、あの家のガンジョ[註10]を連れてこいなどと声がかかった。文王はハイきたとばかりに立ちどころになんでも持ってくるのでなかばアキレていると、こんどはこのうだるような暑さによく御座った。汗ひかしに西瓜を御馳走して進ぜると、いうや否や、舞台に西瓜の種子（たね）を播き、腰の扇を取って、サッと開き、パタパタあおぎ「おがれ、おがれ」と呪文を唱えれば、西瓜が芽を出し、蔓がスルスルと伸び、花が咲き始めた。これを見て大勢の観衆は手を打ってやんやとはやしたてた。文王は得意になり、なおも「おがれ、おがれ」とあおぐと、見る見る大きくなった西瓜を、ポンポン叩いて、もう熟れたと、片っ端しからもぎとって割れば真っ赤である。その西瓜を幾つか食べて見せ、ああ、うまい、うまい、さあおあがり、おあがりとみんなに御馳走したものである。そのうまさといったらホホが落ちそうであった。丁度さっきまで月が出ていたが、俄か雨になった。御土産に傘一本ずつあげる、遠慮はいらないから、さして帰れと、木戸口で傘を渡され、サッと唐傘を開いてドシャ降りの町へゾロゾロ出て行った。一町も行かぬに町の人が、ナンダシャ、オミヤ達、芋殻（おがら）[註11]を大事に持ってなにするシャ、と馬鹿にされ、気がつけば、雨どころか上天気で月もまん丸に出ているではないか。一方町では立店に山と積んである西瓜が一つも残らずなくなったと、商人が顔色変えて大騒ぎしていた。これは文王が立店からチョエチョエ西瓜を運んでみんなに御馳走したのであった。本当の西瓜だからうまいも道理。昔はこんな面白い話をいろりばたでよく聞かされたものである。

註9、てづま（手品）昔は方言で手妻とかき、てづまといった

註10、ガンジョ　丈夫な馬のこと。

註11、おがら　おがらとは麻糸をとったからのこと。